

スギ・ヒノキエリートツリーのコンテナ苗生産技術の開発

平成 27 年度～29 年度（国補）

奥田清貴

再造林を促進するためには育林経費の大部分を占める初期保育コストの低減が不可欠になっている。このため、国では早春時期以外の植栽でも活着率が高いコンテナ苗を使って、伐採と植栽の一体作業により低コスト化を図ることを推奨している。本県はスギ、ヒノキ実生苗の生産県として知られているが、苗木生産では広大な苗畑や重労働である除草作業が必要なため、需要の減少とともに廃業する事業者も多い。

1. スギ、ヒノキのエリートツリーのコンテナ苗生産

根鉢部分の軽量化を目的にココピートを主材にしてパーライト、鹿沼土を少量添加した培地をマルチキャビティコンテナに詰めてスギ、ヒノキ種子の直播きする方法と、育苗箱に播種して発芽させた稚苗をマルチキャビティコンテナへの移植する方法で苗木栽培を試みた。

前年度、ココピート主材のコンテナ培土への種子を直播きしたところ、ココピートの吸水性、保水性不良で発芽が揃わなかったため、今年度は培土の表面に鹿沼土（細粒）を厚さ 1 cm 程度敷いて 4 月上旬に播種した。スギ、ヒノキとも良く発芽し、順調に成育した。一方、4 月上旬に育苗箱に鹿沼土と赤玉土との混合土に播種したものは、ほぼ 100%が生えそろうた。6 月にスギ、ヒノキ稚苗を 150 ml のマルチキャビティコンテナに移植したところ、直播きしたコンテナより成育は良好であった。

今年度は秋口に気温が高かったものの、年明けからは一転低温傾向で3月中旬の苗高測定では、スギ、ヒノキとも前年度の苗高にはるかに及ばず、スギの平均 16.2 cm（18 コンテナ）、ヒノキでは平均 13.6 cm（17 コンテナ）となっている。比較対象の 300 ml コンテナはスギ 25.4 cm（4 コンテナ）、ヒノキは 15.4 cm（9 コンテナ）となっており、150 ml コンテナに比べてやや大きかった。目標としていた苗高 25 cm を越すものは、スギで 6.2%しかなく、ヒノキでは 25 cm を超える個体はなかった。両樹種ともコンテナ内での根量は少なく、コンテナから引き抜くと根鉢が崩れそうなものが多かった。苗木自体も弱々しく、1 年生実生苗として出荷するには成育期間が不足するものと考えられる。このため、次年度はガラス室内で発芽させ、4 月上旬の低温期にも稚苗を成長させることが必要と思われる。



図-1. 直播きして発芽したヒノキ稚苗
(平成 28 年 5 月上旬)



図-2. 直播きで 3 本発芽したスギ稚苗
(平成 28 年 7 月)